オートポイエーシス概念に依拠した言語教育論 : 青年海外協力隊と中米グアテマラの日本語教育を中心に

新井, 克之

https://doi.org/10.15017/1806780

出版情報:九州大学, 2016, 博士(比較社会文化), 課程博士

バージョン:

権利関係:全文ファイル公表済

氏 名 : 新井克之

論 文 名 : オートポイエーシス概念に依拠した言語教育論―青年海外協力隊と中

米グアテマラの日本語教育を中心に―

区 分:甲

論文内容の要旨

本博士論文の目的は、従来の言語教育の主な学習目的となる、話し、聞き、読み、書くといった 4 技能の習得とは異なった学習効果を析出することで、教師と学習者の教室活動による<変容>に 着目した教育モデルを提示することである。そのため、言語学習が就職や進学に直結しない場所に も関わらず、長期間にわたって日本語教育を実施してきた青年海外協力隊と、その教育現場の典型 例として中米グアテマラを研究対象として、関係者に調査・分析を行った。

第1章ではマクロ的な視点に立って、これまでの日本語教育政策を概観した。とりわけ近年、言語教育界で注目を集めているヨーロッパ言語共通参照枠(以下、CEFR)と JF 日本語教育スタンダード(以下、JF スタンダード)に焦点を当て、CEFR、JF スタンダードの根幹となる Can-do 評価法(以下、Can-do)の普及によって多様な言語・文化や教授法の排斥に帰結する可能性について指摘した。

第2章ではミクロ的な視点に立ち、第1章で挙げた課題から教師・学習者の<主体>概念に着目し、これまでの日本語教育論を押さえつつ、社会理論を援用した教育モデルの開発を行った。Can-doの基盤となる概念・機能主義の<主体>概念は学習者の内面や背景、アイデンティティーを考慮せず<主体>によるコミュニケーションの成立を到達点とする。このような Can-do に代表される「機能主義的言語教育」に対し、教師と学習者の相互コミュニケーションによる双方のアイデンティティーや背景等を前提としながら、それぞれの意識と行動様式の<オートポイエティック変容>に着目した教育モデルを提示した。

第3章では第2章で挙げられた<オートポイエティック変容>の実態について PAC 分析とライフストーリーインタビューによって調査分析する方法について論じた。

第4章ではまず「教える側」である青年海外協力隊日本語教師(以下、JOCV)に PAC 分析を行った。その結果、JOCV は学習者の背景やアイデンティティーを重視した「学習者に寄り添った」教育活動を実践し、また教育活動を通じて学習の「楽しさ」等の創発を重視していることが分かった。また就職や進学、日本語能力試験対策といった具体的な学習目的が存在しない教育現場では、日本語を教える方法や目的に対してある種の<葛藤>が存在していることも分かった。

第5章では、現地で日本語を話す機会がほとんどない中米グアテマラの学習者に対して、PAC分析を行った。その結果、日本語を学習する事に、ほとんどの学生が「幸福感」「歓喜」等といった前向きな意識を自己創発していることが分かった。また、学習時間が継続すればするほど、「達成感」や「探求」する意識や「穏やかさ」といった意識も創発させていることも明らかになった。

第6章では、JOCV に対するライフストーリーインタビューを実施し、彼らの日本語教師になるまでの背景と日本語教師になった後の<変容>について検証を行った。JOCV の結果から、日本語教師になる以前は、定年までの定まった人生や残業が多い会社員生活、そして受験勉強等に代表される

日本社会の典型的なライフコースに対する<葛藤>が存在していることが分かった。また JOCV 自身も教師とのポジティブなコミュニケーションにより自らが学ぶ楽しさを体験していることが明らかになった。JOCV は、海外で自らがこれまで経験した学習による「楽しみ」等を学習者と分かち合うことこそが、彼らにとっての「幸福」であり、その意識の創発に向けた人生を JOCV 活動の後も選択していることが明らかになった。

第7章では、グアテマラ人学習者の結果から、彼らが日本語を学ぶ背景にはグアテマラ国内の内戦等の歴史的な問題に起因する政情不安、家庭内不和等という問題が存在することが分かった。つまりグアテマラの社会環境に対しての<葛藤>に対して、学習者は日本語学習に付随する日本的行動/思考様式を学習し獲得する事で自らの「幸福感」または「穏やかさ」等の意識を創発し、その言語学習によって獲得した思考/行動様式に従って<オートポイエティック変容>していたことが分かった。

第8章では、これまでの結果をまとめながら考察を行った。本研究によって JOCV の教師と学習者は日本語教育によって、ポジティブな意識の創発とその持続的な生成に向けて<オートポイエティック変容>していることが分かった。つまり教師も学習者もそれぞれ、本人も意図しない形で自己準拠的に、学習者が所属する社会にも影響を与えるようなエンパワーメント効果が得られることが明らかになった。同時に、本人も当初意図していなかった言語学習の効果として、語学学習を通して、たとえ学習言語を使用する機会がなかったとしても、自身や自身が属する社会のあり方を自ら内省的・再帰的に考えることを促す効果もあるという点が明らかになった。

終章にて、グアテマラ以外にも言語教育の影響や効果、その帰結についての検討することへの可能性と本研究の限界、そして今後の課題について述べた。